

## 第2回 福井県こども・子育て応援会議 議事録

- 1 日 時 令和6年11月20日(水) 13:30~15:30
- 2 実施方法 対面(福井県庁地下1階 正庁) および オンライン
- 3 出席委員 委員名簿のとおり
- 4 事務局 福井県健康福祉部長、福井県健康福祉部副部長(こども未来) 他
- 5 配布資料 別添のとおり
- 6 議事の経過および結果

### (1) 開 会

健康福祉部長あいさつ

### (2) 議 事

【資料1、2および参考資料】について事務局から説明

#### [委員]

優しい言葉がたくさん使われており、細やかに調整をいただいていることが伝わった。意見表明が難しいような子たちへの意見聴取はされているか。

#### [事務局]

こども応援ディレクターの活動を通して、特別支援学校等に行って意見を聴くような取組を行っている。

#### [委員]

「こどもたちに寄り添う」、「こどもたちは家庭で支え合う」ということが重点的に書かれているので安心した。一定程度の生活水準を確保することが、こどもや子育て当事者への安心感や希望、みなさんへの共感につながる。県全体のベースアップをお願いしたい。

#### [委員]

日曜、祝日の一時預かり体制が弱い。需要はあるものの保育士の働き方を考えるとすべてを受け入れるのは不可。他の市町も同様の状況か。どんな方であってもこどもを育て、働ける環境を作ってあげられるとよい。県外観光客からも需要はあるので、保育士の応援体制などがあるとよい。3世代同居、近居を促進する施策があるとよい。

#### [事務局]

他市町の日曜日、祝日の一時預かり開設状況について説明

#### [委員]

10代の方から大人の方まで細やかにアンケートを行い、結果を骨子に組み込んでいるのはすごく素晴らしい。福井県は移住施策にも大変力を入れているが、移住してきた世帯が子育てをする場合、共働きだと家庭内の人手が足りなくなる。時間管理もすごく難しい。そういった時に近所の方の声掛けがあったり、些細なことでも相談に乗れる関係性が築けていたりすると本当に心強い。地域内のコミュニケーションを取っていくことが大事。移住者が自主的に地域に馴染んでいくことは難しいと思う。例えばキーパーソンになる方を配置するなどして、移住者のサポートをしていくことがこれから大事だと思う。

ひとり親の方への支援もこれから充実していくと思うが、「ふく育さん」等の事業で費用面のハードルがあると聞いている。毎月何時間までは使っている、などのサービス枠を設けてもらえるとうよいと思う。

#### [委員]

保育士が足りないといわれる原因と思われる話を聞いた。家に仕事を持ち帰らなければいけなかったり、こどもが怪我をした時だとその責任が大きかったり、といった理由もあるが、保育士間の嫌がらせもあるとのことだった。そのことが、人間関係で仕事をやめる原因につながっている。上司に相談しても、組織として人権対策研修とか虐待防止研修を全員に行うが、当事者の意識変容にはつながっていない。高等教育の段階で、あいさつや、返事の大切さなどを学ぶ必要があるのかもしれない。個別の話をじっくり聞くことが、担い手の増加、担い手の楽しさにつながると思う。

#### [委員]

企業として、子育て当事者の、ワークライフバランスや仕事と育児の両立応援は実施しているが、子育て当事者への直接的な支援も大事だと思う一方で、その社員をサポートする方への支援があるとよいと感じる。会社としても子育て支援をしっかりとやっているということは、社員の安心な働き方につながると考えている。社会貢献等に取り組む企業は数多くあるが、責任を伴う部分もあるため、なかなか自発的に取り組めない企業もある。社会の雰囲気づくりが大事。行政側からも企業に働きかけを行ってほしい。行政側からの提案について、できることはしっかりと対応していきたい。

#### [委員]

福井県は子育てをしやすいという声をしばしば聞く。福井という自然豊かで、教育もトップレベルの環境は子育てにとっても好環境だと思う。各論でいうと、言葉の発達支援という点ではこれからまだまだ改善の余地があると思う。例えば、3歳の子どもを持つ母親のうち、絵本の読み聞かせを行う方は約半数。もっと読み聞かせを推進すべき。スマホ中毒になっている方も大勢いらっしゃる。どこかで規制も必要ではないか。

ゲーム以外の楽しみということでスポーツに打ち込むことも健康面でよい。ただし、睡眠不足には注意が必要。子どもだけでなく指導者も寝不足にならないように会社の理解が必要。早く帰って早く寝るべき。

#### [委員]

子どもの意見が、計画の土台として反映されていることは素晴らしいと思う。子どもと関わって思うことは、子ども自身が、誰かに対して何か貢献できた時、すごくやりがいを感じて、キラキラと輝く。学校の普段の授業を含めて身につけたことを、他人のためや地域のために考えることがとても重要なこと。基本理念にもあるが、「子ども・子育てのよるこびを次世代につなぐ」というところは、たとえば、高齢者と高校生によるスマホ教室など、世代を超えた交流の中で相互に生まれてくるものだったと思った。

#### [委員]

先日、園で預かる子どもに発熱があった際、園から母親に連絡したところ、家族に聞いてみます、との返答があった。そういう場合には、母親に来てもらうのがよりよいと思うが、いち早く迎えにあがるための対応ということもあつたらうし、母親がすぐ来られるようになるには、会社側の理解と積極的な協力が必要。行政の側から、会社への支援や理解促進の働きかけが大事だと思う。

#### [委員]

骨子にはいろんな事業メニューが記載されており、割と行き届いていると思う。保育現場では、担い手が不足している中で、自閉スペクトラムの子どもや、気がかりな子どもの一次対応まで見られないような状況がある。対応ができる体制のことについてもうちちょっと踏み込み込んで検討してもらいたい。

子ども達の意見の中には、福井にイオンモールができてほしい等のキラキラした意見もあれば、優しさや人々の繋がりを求めるような意見もある。どちらも大切だと思うが、子育て世帯が求める環境の考え方や乖離があるような気がしたので、そのことを認識しないといけない。

いろんな事業を周知することで、子育て関係者は目にすることも多くなると思うが、子どもたちまで届いているのかは考えないといけない。SNSや動画サービスを中心に情報を得ている子どもたち世代にあった政策を考えることが大事。

#### [委員]

ヤングケアラーに関する調査結果について、ヤングケアラーへの支援体制は福祉と教育など各部局連携で進めないとうまくいかないと思う。強力に対応を続けてほしい。これだけ丁寧にかつ細やかに政策を準備しているわけなので、周知と利用促進をより一層図ってほしい。

#### [委員]

今関わっている子どもたちの中には、定時制で学校に通う方や、自立支援が必要な方もいる。キラキラした子ども・若者達だけでなく、すべての子ども・若者達を応援することを忘れないでほしい。今後、計画に沿って事業を執行していくことになると思うが、事業の推進があつてこの計画の評価がされるわけなので、しっかりやってほしい。

子どもの成長を地域で応援する方の中には、専門職ではない方もいらっしゃる。いろんな子ども達を見る中

で、どこかの機関に繋ぐ方がよい場面もあるが、どうつないでよいかわからないこともある。専門職とはいえなくても、近い存在としての位置づけが可能になるように取り組んでいただきたい。

**[委員]**

骨子に記載の各項目について、目標はすでにあるか。

**[事務局]**

今回の会議で方向性について議論いただいたうえで、それぞれの施策や目標を決めていく。目標は第3回会議で、お示しする予定。

**[委員]**

先ほど他の委員から出た話にも関連するが、診療の場で感じる事として、例えば3きょうだいの一番上の子が発熱したりして、その母親がその子についているのを見ると、そのこどもはどこか嬉しそうに見える。こどもの目線で見ても母親に迎えに来てもらったり、看病してもらえたりするのは幸せにつながっているように感じる。

**[委員]**

私が勤務する会社では、こどもの発熱や急用で休みを取るということに対して、ほとんどの部署で、理解と協力が得られている。私個人としても今は、子育て当事者としての立場だが、いずれ当事者の方に協力する側の立場になることを意識して、全体の好循環を作っていきたい。

**[委員]**

こどもの健やかな成長という点でいえば、子育て世帯の転勤は、慎重に考えなければいけない。3世代で協力してこどもを見るということが重要。

**[オブザーバー]**

県の計画と整合を取りながら市の計画を取りまとめていく。

**[アドバイザー]**

計画理念についてとても優れていると感じた。目指す姿の方向性も良いものになっていると思うし、こどもや若者といった、施策の最大の当事者の意見を尊重しようという姿勢は素晴らしい。

子育てには地域の支援が不可欠であり、特に職域が大事。職場の支援が子育てと仕事の両立において最も重要な要素。福井県の昨年の調査では、女性から男性の家事育児参加への不満があるという結果も出ており、今後、男性の育児参加というのがすごく重要になってくるのではないかなと思う。本日、企業の理解や協力についての事例も出ていたが、こういった優れた事例を行政が横展開し、子育てにやさしい職場づくりを推進することがポイントになると思う。

今後は、この理念を具体的な施策に反映することが重要だが、優れた施策があっても知られない、使われないということでは意味がない。アプローチ方法を検討いただきながら、知ってもらって使ってもらえるところまでしっかり考えていただきたい。

こども・若者への意見聴取に関して、こどもがどんなニーズを持っているのかということについて、定量的な調査につなげていったほうが、より具体的な施策につながりやすいのかなと感じた。まずはどういう意見がどれくらいあるのかということ把握することが重要な出発点になると思う。

ヤングケアラーについても非常に重要な問題。ヤングケアラーに対する支援も良いが、そもそもそのこどもたちがケアしなければいけない状況になっていることの背景や事情を把握し、そういう必要性が発生しないような方向で、今の枠組みで何かできることがないかという点について、少し気を配っていただけるとよいのではないかなと感じた。

地域ごとに課題は異なるが、福井県だと、女性の就業率が高い一方で、男女間で子育てとか家事のスタンスの違いがある。例えば、40～50歳の方だと、男が子育てするとか育休を取るというのは全く体験したことがないから想像もつかないことなので、職場で部下にそういったリクエストをされても配慮できないし、そもそもリクエストできるような雰囲気職場になっていないということがよくあると思う。福井県で行った調査を見ても、性別役割分業のところ、特に女性は大きな不満を感じ、男性もそこに限界を感じているというのが見られる。現代の子育て世代の声に耳を傾けていかないと、経済の観点から考えても、働き手の不足といった問題がなかなか解消できなくなってしまう。若い人に福井で働いて、福井でこどもを育てる、ということに対し

て自信を持って選択してもらえらるような環境を官民一体となって進めていただくことが非常に大事。

**[委員]**

(アドバイザーに対して) 理想とするお子さんの数と実際の数のギャップを埋めていくにはどういうことからやっていかなければいけないと考えるか。

**[アドバイザー]**

何か一つ解決したらすべて解決するというようなものではない。非常に複合的な問題なので、それらが解決されないと、ご指摘いただいたようなギャップというのは埋まらないと思うものの、行政としては子育て支援を充実させるということが最初のステップになる。行政としての支援は国レベルで見ても劣っているわけではないが、職場の理解も大事である。行政が介入することは難しいところもあるが、好事例の共有や、場合によって支援金の提供といった形で支援することが、最終的にこどもを求める方の願いを叶えることにつながるのではないかと考える。